



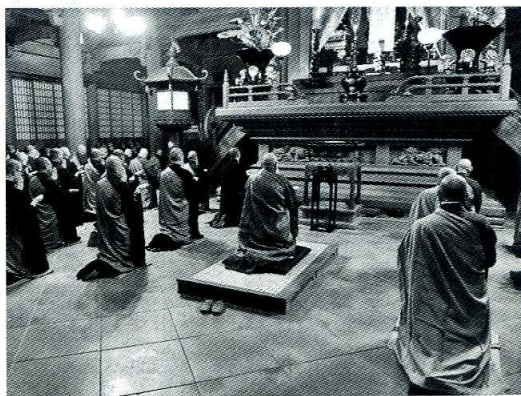
## 大本山永平寺

### 迎冬

永平寺では今年の二月の豪雪を思い起こしつつ冬支度に万全を期すため綿密に準備を進めています。さて、今月中旬より冬制中が始まり、百日間、ことさら峻厳な修行の日々が連続します。思うに修行僧は幸せです。万事の条件が整い続けているからこそ修行に専念でき、彼らの関わっている縁が安寧であるが故に今ここに居られるのです。その縁に心から感謝しつつ精進せねばなりません。

冬の行持の中で峻厳なる修行の代名詞ともある「摂心せつしん」は来月十二月と明けて二月の二回勤めます。一週間ただひたすらに坐禅を行います。坐より離れることが許されるのは、「経行きんぎん」という坐禅後に堂内を牛歩よりさらにゆつくりとした歩みで行う歩行禅の十分間と、東司とうす（御手洗い）の十分間、清掃と夜の睡眠のみです。独特の雰囲気にも誰もが辟易しますが、共々励まし合い勤めます。摂心を勤めることができるのは幸せなことだと思えるようになるのは、彼ら

にとつては後年かもしれない。冬の訪れと共にその日は近づいています。





## 大本山總持寺

十一月五日は、明治四十四年、  
 本山が能登から鶴見に移転し、  
 その遷祖式せんそしきが、放光堂で盛大に  
 行われた日です。この日、御開  
 山瑩山禪師、二祖峨山禪師はじ  
 め祖師がたの御真牌が能登より  
 移され、これをもって正式に本  
 山が移転したことになりました。  
 境内は、御移転を祝う人びとで  
 あふれかえっていたと伝えられ  
 ています。

ところで、放光堂は、山形県  
 鶴岡の総持寺さまの本堂を、寄  
 進いただき移築したものです。  
 昭和四十年に大祖堂ができるま

で、本山の様ざまな行持、法要  
 の中心となる法堂ほつどうでした。

放光堂の寄進を含め、伽藍を  
 整えるにあたっての、境内地の  
 確保や堂宇の建設には、篤信の  
 方がたの多大な援助が寄せられ  
 ています。それを考えると、鶴  
 見での本山の歩みは、全国の御  
 寺院・檀信徒の方がたのご尽力  
 の賜物といえます。

本年は、御移転から百年目を  
 迎え、四月から、記念団参をは  
 じめとした、特別行持に取り組  
 んでおります。特に十一月一日  
 から、五日にわたって、御移転

百年の本式典が盛大に執り行わ  
 れ、報恩の法要が営まれます。



# 曹洞伴壇

選・村松五灰子

## 円朝の下駄音で来て涼み台

東京都 伊奈 三郎

評 駒下駄の「カラコン、カラコン」で知られる初代円朝よりの「怪談牡丹灯籠」は「番長皿屋敷」「四谷怪談」と並ぶ日本三大怪談。美しい娘の幽霊の下駄の音。我が下駄音の、そんな想像に縁台の涼しさは一人。

## 藤壺論あらかた溶けてかき氷

愛知県 松井 暁美

評 帝の室、藤壺を恋焦がれる光る君。それを受け入れてしまふ藤壺は厄に。そして若くしてなくなる。藤壺の生き方を通して現代の恋の論議は弾む。気がつけばかき氷は。

寝たきりの笑みを浮かべる菊枕 神奈川県 柳原あきとし

てのひらのおもき幸せ梨熟る 宮城県 伊藤 敬吾

原発を語らぬ日無く大暑来る 岩手県 関谷 新一

ヘリコプターの音にむにやむにやして昼寝 静岡県 渥美ふさ子

天皇の丸き背おもふ終戦忌 愛知県 田中 澤子

盆の月舗道のほてりまださめず 秋田県 松山 露州

民宿の下駄を喜ぶ素足かな 北海道 福島 眞也

夏足袋を跣に替へて作務の僧 秋田県 鈴木ゑい子

ペンダント押さえて飲みし岩清水 埼玉県 橋本 永子

端居して互ひに仮面外しけり 鳥根県 藤江 堯

### \* 選者吟

鷹の得し物より羽根のこぼれけり

五灰子

### \* 作句小見

三句め、菊枕は延命の力、陶淵明も久女も。四、天災人災の中生きてゐる喜び。五、人が制御できないものをいかに。

六、うたかたを。七、昭和を背負われ。八、昼の名残はなお

足下に。現世は修羅もあり喜びも又、跣や素足、恵みの清水、

心安らぐ端居にも。ああ日本。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

実を結ぶ過程のひとつ野草みな炎暑のな  
かを咲きて散りゆく 兵庫県 前田あつ子

評 二句目までの端的な表現が、三句目以下へ読み手を惹き  
付ける。この言葉はこびと「炎暑」を野草と同じように乗り  
切ったという実感が、困難を経た後に何事も成るのだと、箴  
言めいた歌になりそうなところをうまく逸らしている。

遠き日の思いを今になつかしみ枇杷をつつめ  
る紙そつととく 山口県 中井 清子

評 今は薄紙にひとつずつ包まれて売られるようになった枇  
杷の実。昔は木から直接挽いで食べたたりした野趣を帯びたも  
の。そうした遠い日の思い出をそつと大切にしている作者だ。

夏の宵サラリーマンらがビール酌むビアガーデンの片隅に座  
す 東京都 長谷川 瞳  
十五キロ夏の山道歩き終えふつふつと湧き上がってくるもの  
静岡県 高尾 善五

大方は食わずに捨てる白菜を一人居われは楽しみに播く

福島県 西木 甚

夜の空にまたたく星を仰ぎつつ余震に吠える犬を抱きぬ

福島県 大槻 弘

下校する途次に採りたる通草の実少年時代のみちくさの味

秋田県 小田嶋恭葉

夫と母桜の頃に身罷れば咲いて淋しき花となりたる

福井県 澤崎 澄子

少年ら白のジャージー泥んこに楯円の球追う子馬のごとく

東京都 野村 信廣

土用干し三日こなして吾ながらよき塩梅とし蓋を閉じたり

三重県 野呂 と志

投稿の葉書一枚書く度にポストへ早足リハビリ兼ねて

山形県 多田 さよ

門の辺にみどり鮮らけき雨蛙飛び交ふ朝の心うれしも

福井県 三浦 豊子

## \*選者詠

まだ青き稲田の上をひるがえりまたひるが  
えり飛ぶは蝙蝠 ちづ

## \*作歌小見

一匹ではなく数羽の蝙蝠の群れでした。縹色の夕空にその  
シルエツトが乱舞して幻想的でした。都会ではも  
う見られなくなってしまうかも知れない光景。生き生きと  
した雨蛙に励まされる三浦さんの歌にも共感を覚えます。